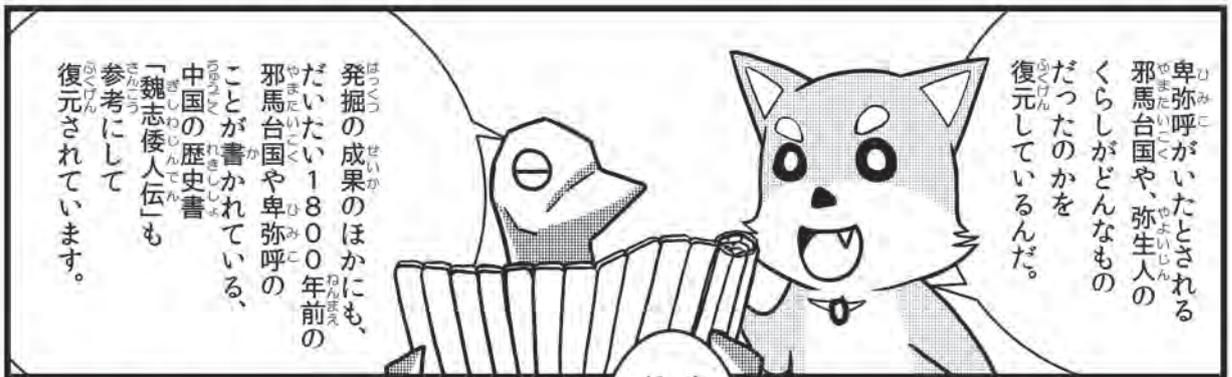
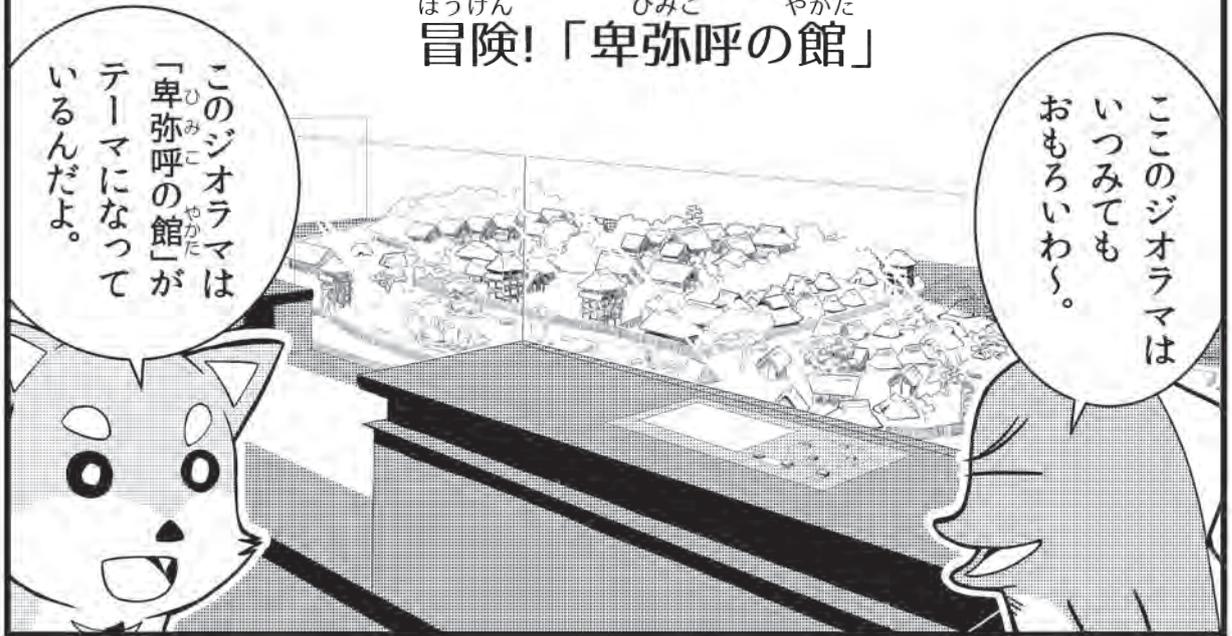


HIMIKO QUEST

ぼうけん ひみこ やかた
冒険! 「卑弥呼の館」

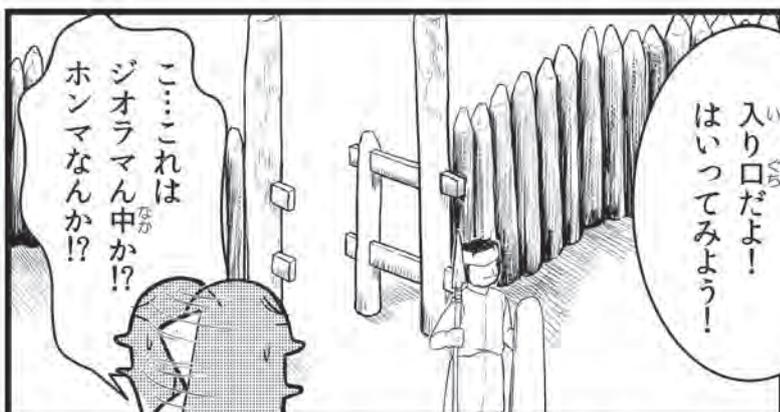


※リュウさんは池上曽根遺跡の井戸から出土したツポに描かれた龍の絵から飛び出してきました。

復元模型・卑弥呼の館

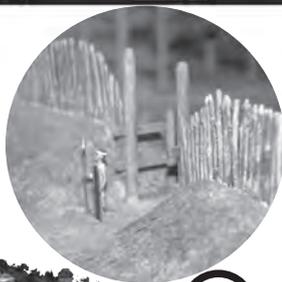
平成2年に弥生文化博物館が開館して以来、来館者の人気を集め続けるジオラマです。卑弥呼の宮室があったとされる邪馬台国について、魏志倭人伝などの記述や、発掘調査で見つかった考古資料、民族・民俗事例など、学際的な研究のもとに復元製作されたものです。環濠集落として復元されたムラの中には、当時の人々のくらしの様子がいきいきと表現されています。ムラを中心となる少し小高い場所は、柵などで四角く区画されています。ここが卑弥呼の「宮室」エリアです。





毎日挑戦できる「カイトの挑戦状」や、イベントなどで配布している「考古楽カード」平成27年現在の情報です。考古学や歴史、博物館のことを紹介している入門教材です。弥生博の展示資料をイラスト化したカードも多いので、展示室で探してみてくださいね。考古楽カードは、勉強になるだけでなく、「火」「葉」「水」の3種の属性バトルも楽しめます。また、54種すべて集めると「かるた」や「トランプ」としても遊べますよ〜!

柵に囲まれたムラ



弥生時代の大きなムラには、周囲に大きな溝をめくらせ、柵や杭で厳重に囲んだものがあります。侵入を防いだり、争いに備えるための施設だったのでしょうか。このジオラマでは、ムラの入り口に門番が立っています。ムラびと以外の通行を厳しく見張っていたのかもしれませんがね。

魏志倭人伝には、対馬国や一支国についての記事の中で「南北に市糶（してぎ）する」という記述があります。「糶」の字には「米を買い入れる」という意味があり、良田が無いものの、豊富な海産物が得られる島国の弥生人が、海を渡って米などを求めに行っていたことを示します。弥生人たちはムラとムラをつなぐネットワークの中で、必要なものを取引していました。「市」は、様々なヒトやモノが集まる場だったのです。



市のように



ムラの右手にある「市」には、たくさんの人がいて、活発な取引の様子をうかがわせます。

たくさんの土器を積み上げる店、農作物を並べる店、カゴに作物をいっぱい入れて歩く人もいます。お金はありませんから、取引は物々交換です。少しでも有利な交換ができるよう、アツい交渉が繰り返られていたかも！



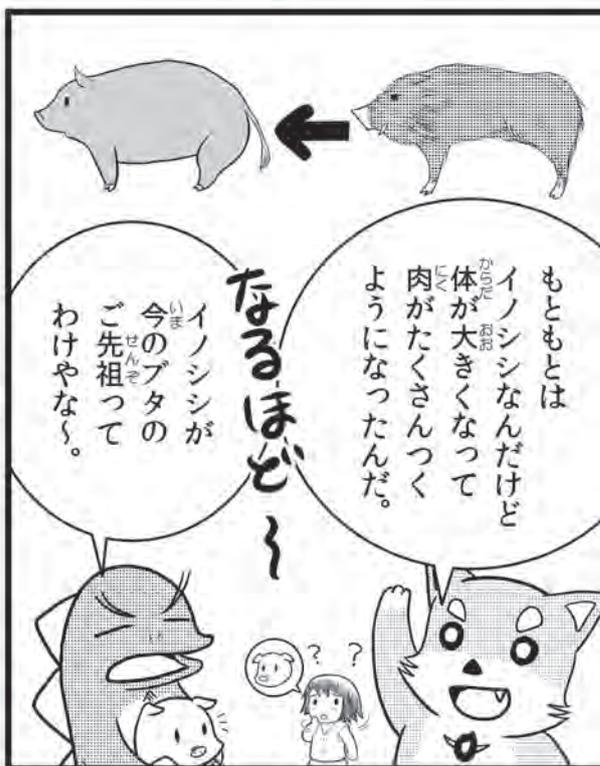
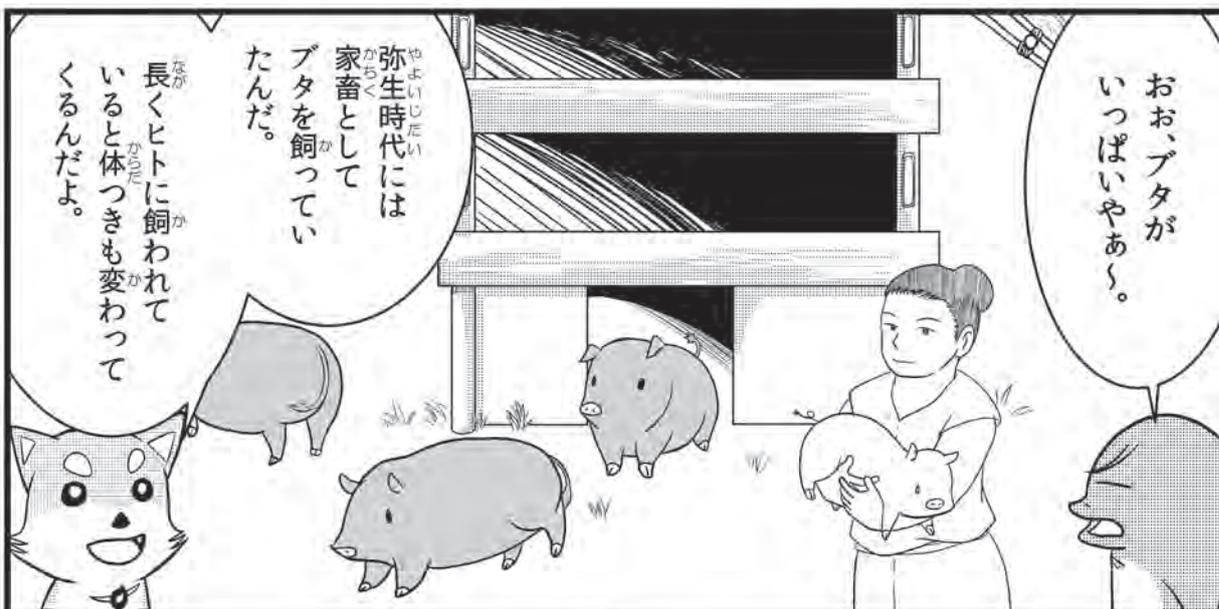
現在では水道が完備されて、蛇口をひねればキレイな水が出ますが、江戸時代までは井戸水が多用されました。井戸の歴史は弥生時代までさかのぼります。畑作物への水やりのほか、ムラが大きくなって人口が増えたりなどして、たくさんの方が水が必要となり、井戸が発明されたのかもしれない。

ムラの暮らし



ムラの広場の中央には井戸があり、土器の釣瓶（つるべ）で水をくむ女性があります。他にもジオラマの中には、カゴを編む人、柿を取る人、休憩する兵士、環濠にゴミを捨てに来た人などなど、様々な「ムラの暮らし」が復元されています。ジオラマの中に復元されたムラびとたちは、実に300人以上！ちょっと小さいけど、個性的な彼らの暮らしを覗いてみませんか。





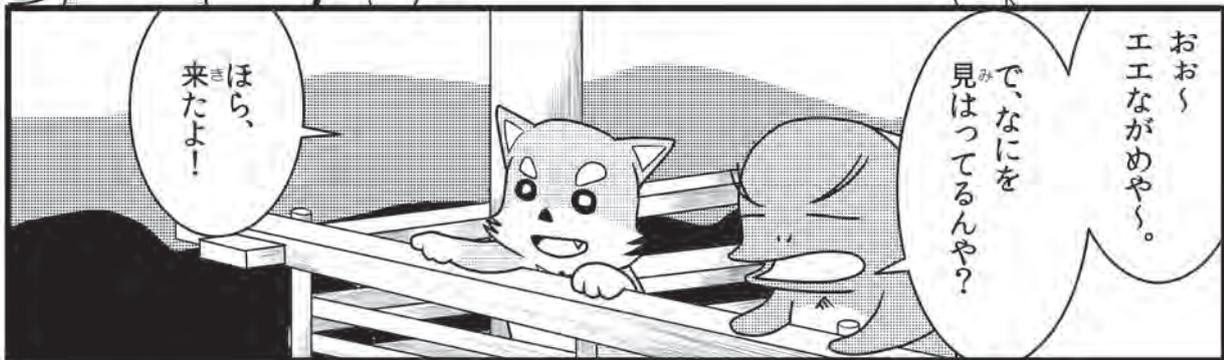
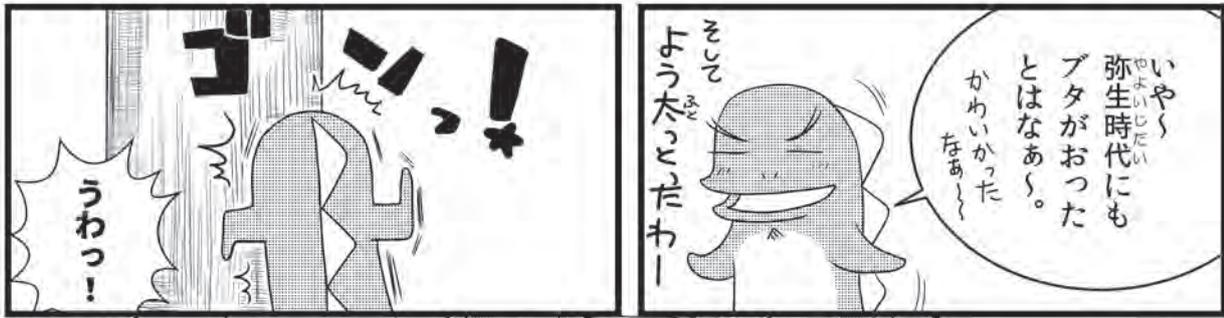
食用家畜の飼育がいつから始まったのかについては諸説があります。出土する骨の観察や分析から、弥生時代にはブタが飼われていたと考えられています。その由来については、大陸から渡来してきたという説と、イノシシを日本で家畜化した説などがあります。

ブタを飼う



ジオラマの中には、高床式倉庫の床下に作ったスタ小屋が3ヶ所に復元されています。

性格がおとなしく、何でも食べる雑食性のスタは、人間が残した食べ残しなどの処理係として、そして時には栄養豊富な食糧として、ヒトのそばにいたのでしょね。



魏志倭人伝に「楼観（ろうかん）」と記されるのは、ひときわ高く造られた「物見やぐら」のことです。遠くまで見渡せる物見やぐらの上で、ムラに出入りする人を見張ったり、戦争などの有事の際には防衛施設としても機能したのかもしれない。佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、物見やぐらと考えられる遺構がみつかっており、歴史公園に復元されています。

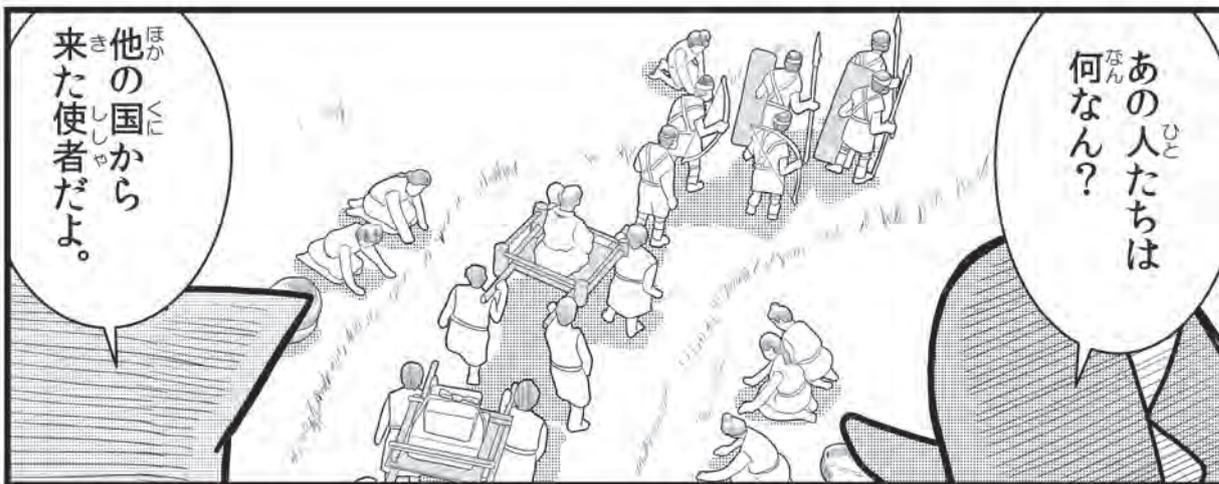
物見やぐら



ジオラマの中には、物見やぐらが5基復元され、弓を持つ兵士が見張りをしています。ムラの外周に沿って建てられているものと、内側の方形区画（内郭）に沿って建てられているものがあることに気が付きましょう。

戦争などの有事の際には、ムラを守るためのいくつかの防衛ラインがあり、それぞれに物見やぐらが建てられていたのでしょう。

魏志倭人伝には、「(倭国に)牛馬なし」と記されています。当時、中国では普通だった牛や馬などの家畜がないことが珍しかったのでしよう。広大な国土に広い平野を持つ中国では、陸路での移動に馬を利用しますが、倭国には馬がいなかったため、中国(魏)からの使者も徒歩で邪馬台国を訪れたはず。



牛馬なし



ムラの入り口付近の行列には、他国からの使者の行列がみえます。中でもえらい人やみつぎ物は、輿(こし)で担がれて大切に運ばれます。4人ほどで担ぐとはいえ、大変だったでしょうね。右手の林の中には輿を下ろして休憩する従者たちのすがたが見えます。



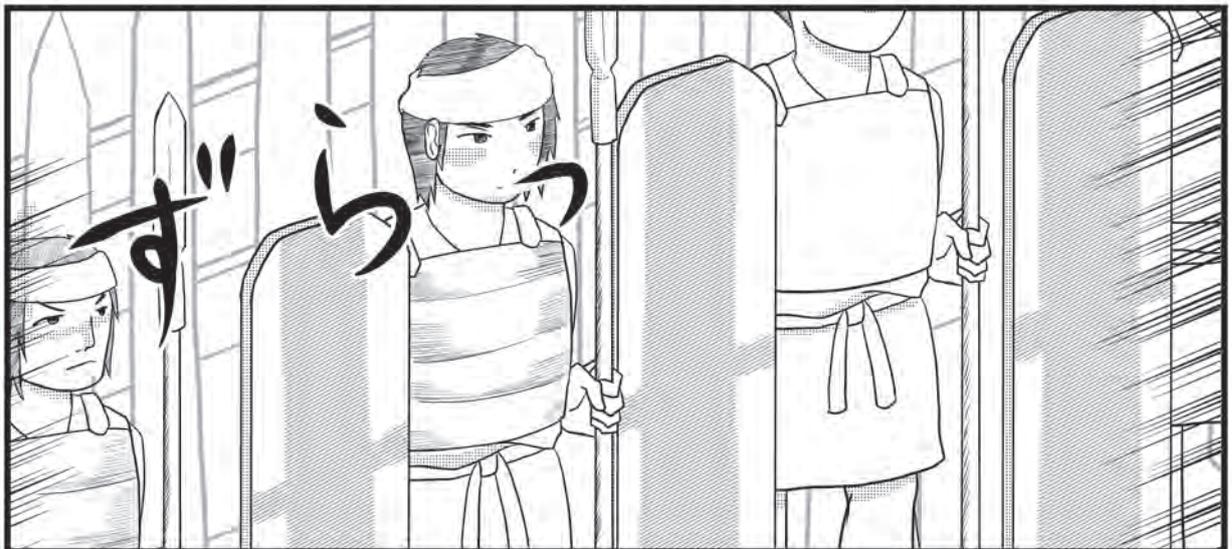
いまのように電話がない時代、遠方に素早く情報を伝えるために、「狼煙（のろし）」が使われました。山や丘から上がった煙は遠くからでもよく見えます。一定の距離に点々とろし台を配置し、遠くでのろしが上がるのが見えたら、自分の持ち場でろしを上げる。そうして順番にのろしを上げていくと、遠方ですぐに情報が伝えることができますね。

のろし



ジオラマの中では左奥の方で上がっている「のろし」。これまで気付いていなかった方も多いのではないのでしょうか。高台の開けた場所から上げられるのろしは、大陸からの使者が到着したことを報せているのかもしれない。

弥生時代には、水田稲作とともに金属器の利用も始まりました。銅鐸や銅剣などの「青銅器」は、ドロドロに溶かした金属を型に入れて固める「鑄造」で造られ、農具の刃先や鉄剣、鉄鏃などの「鉄器」は、材料になる鉄の素材をたたき延ばす「鍛造」で造られています。特に青銅器は銅鐸や銅矛など、祭祀の道具として発達しました。土や石、木の道具を使う弥生人にとっては、金属の光沢や、高く澄んだ金属音が、神秘的なものを感じさせたのかもしれない。



金属器の利用



ジオラマの左手前には、柱がたくさん並ぶ長細い建物が見えます。中では上半身裸の男たちがハンマーを振ったり、火をおこしたり。この建物は金属器(青銅器や鉄器)の工房です。一見すると単純な肉体労働に見えますが、金属を溶かす高温の炉や材料の配合など、金属器の生産には最先端の知識と技術が必要です。



魏志倭人伝には「租賦(そふ)を収む」との記述があります。租賦とは、年貢や税金のようなもの。弥生時代の後半には、はつきりとした身分の差があり、民衆はその生産物の多くを王に収めていたのでしょう。租賦を収蔵するための高床式倉庫群は、宮室と隣り合ったエリアにあって一般人の立入りが厳しく制限されています。

租賦



ジオラマの左側には、柵で囲まれた倉庫群が見えます。これらの倉庫への入り口は、卑弥呼がいるムラの内郭にしか開いていません。この倉庫群は、他国からのみつき物や下賜品のほか、一般民衆から納められた作物などの「租賦」を保管するためのものです。倉庫へモノを納めるムラびとの横では、兵士が見張りをしています。

弥生人の髪型についてはよくわかっていません。魏志倭人伝には「木棉」（木の樹皮やツルのようなもの）で、まとめたり縛っていた様子が書かれています。男性の髪型については、後の古墳時代の埴輪の髪型や、出土人骨に残った髪の毛の状況から、頭の横で結った「美豆良（みずら）」説、人形土製品や人物絵画の表現から「モヒカン状の鬘（まげ）」説などがあります。



倭人の髪型

弥生人の男性は、どんな髪型をしていたんだろう。想像してみよう!



美豆良（みずら）



モヒカン状の鬘（まげ）



後ろでくる



ザンバラ髪



スキンヘッド



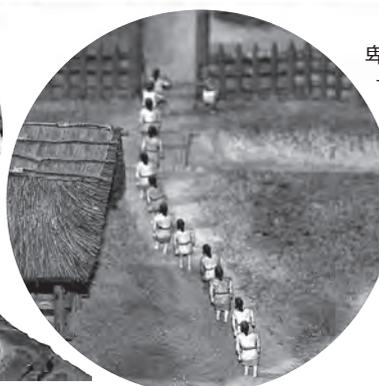
男弟

ほとんど人前に出ることがなかった卑弥呼は、とても神秘的な女王です。夫のいなくなった卑弥呼が国の政務を執る際には、ただひとり、宮室に自由に出入りできた「男弟」にその言葉を伝えてもらっていたようです。なんだか大変そうですが、卑弥呼の言葉を伝えるこの弟こそ、本当の権力者だったりするのかもしれないね。

魏志倭人伝には、「婢千人」が卑弥呼に仕えていたことが記されます。
女王卑弥呼の宮室は聖域として、ただひとり出入りが許された弟以外の男性の立ち入りが厳しく制限されていたようです。宮室に閉じこもり、鬼道（呪術）のようなもの（でしょうか）をあやつる卑弥呼。そのミステリアスな存在は、古代史最大の謎として、いまなお多くの人を魅了しています。



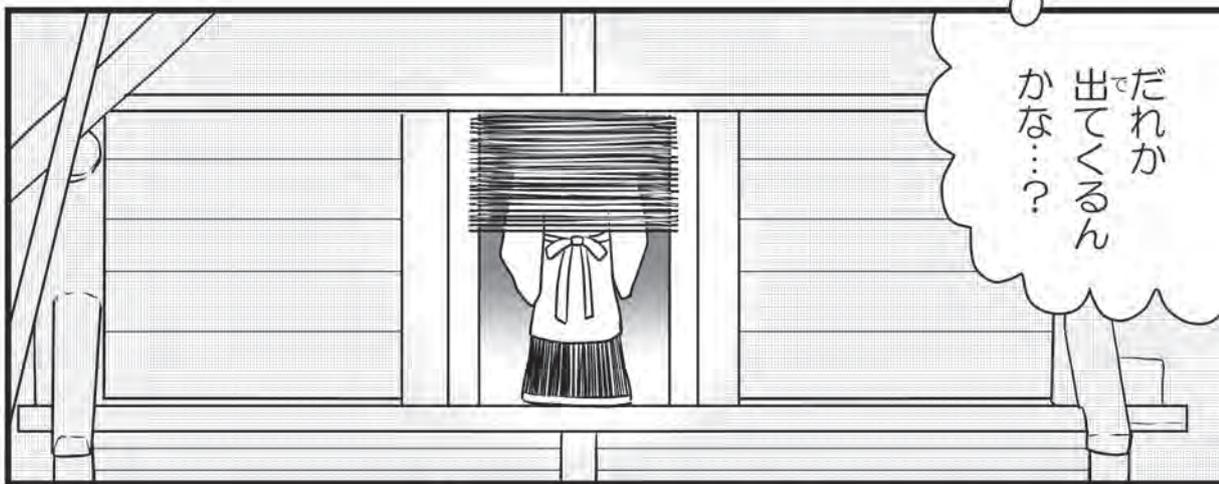
1000人の 侍女



卑弥呼の宮室エリアの右側には、柵で囲まれた住居域があります。

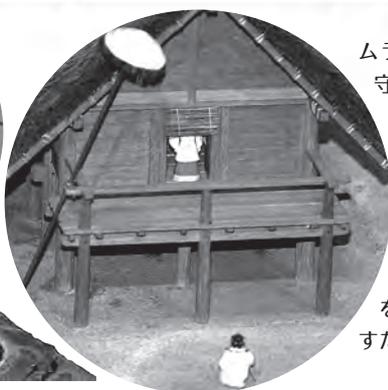
ここでは、卑弥呼に仕える侍女たちが住む場所。

少し遠いですが、卑弥呼の宮室に出仕するために、列を作って並ぶ侍女たちの姿が見えるでしょうか。



「魏」は、当時中国にあつた大国です。卑弥呼は日本列島内にとどまらず、外国とも盛んに交渉を行った国際的な女王でした。大陸の大国にみつき物を送り、その傘下に収まることは、自らの権力を強固にするだけでなく、大陸の進んだ知識や文物を取り入れるために必要なことだったのでしょうか。

魏からの使者



ムラの中心部には、たくさんの兵士に守られた一角があります。魏からの使者が並ぶ、さらにその奥の白いカサが立てかけられた立派な建物。そこから出てこようとする女性こそ、女王卑弥呼です。はるばる海を越えてやってきた使者に会うために、珍しく人前に姿を現した卑弥呼。しかし、その顔はすだれの向こうに隠れたままです。



魏にみつぎ物を送り、その返礼としてたくさんの品を下賜された卑弥呼。その中に「銅鏡百枚」がありました。卑弥呼がもらった鏡はどのようなものだったのでしょうか。卑弥呼が魏に遣使した「景初三年」（西暦239年）前後の年号が刻まれた鏡に「三角縁神獸鏡」と「画文帯神獸鏡」などがあります。どちらかが「卑弥呼の鏡」なのでしょうか。まだまだ明らかにならない謎です。



卑弥呼の鏡

当館の卑弥呼が掲げているのは、和泉黄金塚古墳から出土した「画文帯神獸鏡」をモデルにした復元品です。この鏡には卑弥呼が魏に使いを送ったとされる「景初三年」（239年）の年号が刻まれています。

三角縁神獸鏡

画文帯神獸鏡

鏡の縁（ふち）の断面が三角形。

鏡の縁の断面は平たく、絵（画）と文様が鑄出されている。





平成27年3月、弥生博は約24年ぶりにリニューアルしました。第1展示室の中央に新しくお目見得したのは、鏡を掲げる卑弥呼。その周りには、同時代頃に作られたたくさんさんの銅鏡や、「卑弥呼の食卓」などの復元資料が並びます。弥生博は「卑弥呼と出会う博物館」として、よりダイナミックで親しみやすい博物館を目指して日々進化を続けます。

卑弥呼と出会う博物館

弥生博の第1展示室にいる卑弥呼に会いに行こう！
その手に掲げた銅鏡は、当時の銅鏡とほぼ同じ成分(錫・鉛・銅の合金)で復元したもの。
ピカピカに磨かれたその表面には、ちゃんと顔が映るよ！

